

2011年度「未成年者飲酒予防基金」活動報告

兵庫教育大学大学院 学校教育研究科 西岡伸紀
「大学生の飲酒に関する意思決定及び関連要因に関する研究」

研究背景、目的

本研究では、大学生の飲酒に関する意思決定やその関連要因を把握し、問題飲酒の防止対策を検討することを目的とする。具体的には、質問紙調査により、飲酒状況と意思決定能力、対人関係スキル、先輩や同期生の圧力に対する認知、規範意識等について調査し、関連性を分析した。

方法

1. 調査対象

関西の2大学の大学生202人（男子67人、女子132人、性別不明3人）を対象として、調査者が授業の最後に調査票及び回収用封筒を配布し、学生は、記入後に調査票を封筒に入れて密封し、調査者に提出した。

2. 調査内容

調査項目は、大学生の飲酒調査に関する先行研究、及び大学院生8人（男子4人、女子4人）を対象とした飲酒に関するグループインタビューの結果を踏まえて作成した。具体的には、学年、年齢、性別、住まい、部活等への所属と種類、生涯飲酒経験、最近1年間の飲酒頻度、飲酒に関わる失敗、イッキ飲みをさせられた経験と機会、イッキ飲みやその対策に関する意識、対処の自信（15項目）、重大な意思決定に関わる能力（20項目）、社会的スキル：KISS18（18項目）とした。

意思決定尺度については、Millerら¹⁾の開発した Decision-Making-Competency Inventory (DMCI)を使用した。この尺度は、重要な意思決定に関わる質問20個から構成される。尺度は、「情報に基づく認識」「自己認識」「自律性」「自信」の要因から成る。尺度の信頼性と妥当性は検証済みであり、それらを翻訳して使用した。対人関係能力については、大学生等を対象としてよく使用される社会的スキルの測定尺度である KISS18 を用いた。

結果

1. 飲酒に関わる状況

生涯の飲酒経験率は、男子97%、女子87%であり、ほとんどが飲酒を経験していた。また、男女間に有意差が認められ、男子の方が高かった。イッキ飲みをさせられた経験（以下、イッキ飲み経験とする）の割合は、男子51%、女子18%であり、男女間で有意差が見られた。イッキ飲みの機会については、部活動での新歓や通常の飲み会、友だちとの飲み会が多かった。

2. イッキ飲みや未成年飲酒に関する意識

イッキ飲みについて、肯定的意見が男女とも半数を超えたのは、「その場の雰囲気を盛り上げる」である一方、イッキ飲みが「危険である」に対してはほとんどが賛成した。また、6割程度が「させられると苦しい」と回答した。対策については、賛成が半数を超えたのは、「イッキ飲みが始またら周囲が止めるべき」「大学は厳しく禁止すべき」「部活動やサークルでは、上級生が禁止を徹底すべき」であった。一方、大学生の未成年飲酒に対しては、イッキ飲みほど厳しいものではなかった。

3. イッキ飲み関連要因

イッキ飲みの関連要因として、最近1年間の飲酒状況、イッキ飲み等に関する意識、意思決定能力、社会的スキル、部活動やサークルへの所属の有無について、男女別に分析した。

男女とも、イッキ飲みの経験と1年間の飲酒状況には有意な関連が認められ、いずれも、イッキ飲みの経験がある場合は無い場合に比べて飲酒頻度が多かった。部活動等への所属については、女子では有意な関連が見られ、部活動等に所属する場合、イッキ飲みの経験率がより高くなり、4倍以上を示した。男子においても、所属する者は、所属しない者に比べて10%程度高かったが、有意な関連は見られなかった。

意識との関連については、15項目中、男子3項目、女子9項目において有意な関連が認められた。それらにおいては、イッキ飲みを経験している場合、イッキ飲みや未成年飲酒に対してより肯定的である、誘いに対して断りにくい、同級生のイッキ飲みなどに同調しやすいなどの傾向にあった。

イッキ飲みと意思決定能力との関連については、男女とも、経験者の方が平均得点は低い値であったが、有意差は認められなかった。しかし、飲酒に関する意識の各項目との関連を見ると、上級生や同級生からの誘いへの対処、イッキ飲みへの同調などにおいて有意な相関が認められた。

イッキ飲みの経験と社会的スキル得点との関連では、男子では経験者がやや低く、女子では経験者がやや高い値であったが、いずれも有意な関連は認められなかった。

考察

本研究対象は少数であるが、その飲酒経験率や年間の飲酒頻度は高校3年生に比べて高い値であるが、飲酒頻度が特に高いわけではなく、本対象は、大学生として特別な集団ではないと考えられた。

大学生の問題飲酒のうち、未成年飲酒については、本人の飲酒経験率が高く、大学生の未成年飲酒の禁止、大学や上級生による禁止に対しても賛成は3~5割程度であった。大学生の未成年飲酒は一般的であり、対策は容易ではないと考えられた。

イッキ飲みについては、経験率は、男子では高率(51%)であり、女子でも低率とは言えなかった(18%)。イッキ飲みに対しては、肯定的に捉えている面もあるが、危険性や苦しさの認識も高かった。また、上級生の誘いが断りづらいとの意見が多く、対策について

は、禁止のための大学や上級生の介入、周囲の者の介入などが5～7割賛成された。イッキ飲みに関わる要因としては、日常の飲酒頻度が高いこと、部活動に所属していること、イッキ飲みや未成年飲酒に対して肯定的であったり寛容であったりすること、誘いへの対処の自信が低いことなどがあった。以上から、対策としては、個人の知識や対処能力を高めることに加え、学生からの要望として多かった「大学」「部活動」などによる対策、「上級生」による介入など、社会的対策を含む多様な対策が必要と考えられた。

文献

- 1) Miller DC, Byrnes JP, Adolescents' decision making in social situations: A self-regulation perspective. *J Appl Dev Psychol.* 22, 237-256. 2001